

陳 路（関西大学大学院）

「室町中期における朱子学の受容——桃源瑞仙をめぐる」

桃源瑞仙（1430～1489）は室町中期の臨済宗の僧である。その代表作『史記抄』は中世口語だけでなく、叢林の学風、中世日本の史学も反映する貴重な抄物資料として全文の翻刻、版本の影印がなされ、研究者たちから関心が寄せられている。同書に関する研究は、国文学をはじめ、文学、史学、医学などの分野にまで波及している。しかし、よく調べてみると、同書には朱子学関連の記述も多数含まれていることがわかる。

『史記抄』中の朱子学関連記述は朱熹の著作および関連著述から引用の二種類がある。前者については『論語集注』『孟子集注』『論語或問』『孟子或問』『朱子語類』『通鑑綱目』『詩集伝』『易学啓蒙』『朱子家礼』があり、後者については『詩集伝』、『春秋集注』『四書輯釈大成』などが用いられている。これら朱子学関係の著作を数多く使用して『史記』本文を注釈しているのである。

『史記抄』は主に牧中梵祐の『史記』講義聞書と桃源自身の『史記』抄講記録より構成されている。しかし、牧中講の部分は朱子学どころか、経書の記述も殆ど利用していない。さらに当時の日本の漢学が紀伝道と明経道によって経学と史学に分離していたことを考えれば、桃源が朱子学を含む経書類を大量に利用して『史記』の本文を註釈したことは、当時の五山禅林だけではなく、日本の中世漢学界全体にとっても新しい展開といえるであろう。

そして、この新しい展開は当時の五山禅僧と公家儒者の知的な交渉関係を示すものでもある。桃源によると『史記抄』で講じた内容は彼自分の発想だけではなく、禅僧の竺雲等連、瑞溪周鳳、雲章一慶や公家の儒者清原業忠、一条兼良らから受けたものでもある。雲章一慶は兼良の庶兄であり、瑞溪周鳳と業忠の間でも儒学の知識は交換されたらしい。桃源は雲章と瑞溪の門下なので、こうした関係を通して兼良と業忠から儒学の講義を受けたのであろう。そうであれば、『史記抄』における朱子学的な注釈は、桃源自身の経史学のみならず、五山禅僧と公家儒者の知的な交渉の成果であったことも意味するであろう。